＜論文＞

東日本大震災と人間環境論（２）
―教育モデルとしての寺田寅彦―

杉 田　正 樹*1

The Tohoku earthquake and the Thought of human environment (2)

Masaki Sugita*1

Torahiko Terada is an excellent physicist as well as an essayist and poet. His ability for exact representation is derived not only from the observation skills of a scientist but from his poetic sensitivity. This gives him both a broad view and deep insight. When considering educational need after March 11, Torahiko is an excellent model to study. Here, we examine his theory of disaster and “Japanese view of nature”.

＊１　Kanto Gakuin University; 1−50−1, Mutsuurahigashi, Kanazawa-Ku, Yokohama 236−8503, Japan.

key words：東日本大震災（the Tohoku earthhquake）、寺田寅彦（Torahiko Terada）、
災害論（theory of disaster）、俳句（haiku）、日本人の自然観（Japanese view of nature）

は じ め に

先に本『紀要』第16号に執筆した、拙稿「東日本大震災と人間環境論」[1)]は、大震災への哲学からの応答であるとともに、当時もち上がっていた人間環境学部の解体論への緊急の対応でもあった。これら二つの事情と、紙幅の制限もあり、つい、前のめりな物言いになってしまったのは、我ながら遺憾であった。

事態はいまだ収束に向かってはいない。被災地の復興は、まだ緒についてもいないし、原発の「冷温停止」を前倒しで実現するなどと言うのも、メルトダウンしている以上、ほとんど無意味である。放射能汚染については、何ら方針がだせず、基準緩和で事態を放置し、近い将来の被害に目をつむり、取りあえず先送りすることに終始しているありさまである。また、ナオミ・クラインが指

＊１　関東学院大学人間環境学部人間環境デザイン学科；〒236−8503　横浜市金沢区六浦東１−50−１
１）　関東学院大学『人間環境学会紀要』第16号、2011年、１～16ページ。

摘する「ショック・ドクトリン」、すなわち、大惨事につけこんで実施される過激な「市場原理主義改革（惨事便乗型資本主義）」の利権ビジネスに翻弄されそうな事態が懸念されている[2)]。

とくに原発事故に関しては、今後、隠ぺいされた事情が明らかになるにつれて、技術的問題のみならず、倫理的問題も検討されるであろう。海外での脱原発の情勢を参照しつつ、広く議論が起こるはずである。

ところで、その拙稿の第３節「人間環境論と教育」において、５つの問題を出しておいた。（１）人間の卑小と非力、（２）死の問題、（３）傲慢、（４）虚偽の問題、（５）未来における光明の問題、がそれである。これらについては、十分述べることができず、「聴くこと」の重要性を指摘したにとどまった。

われわれはここでは、寺田寅彦について論じることにしたい。かれはわれわれの問題意識からしても、目指すべき教育目標の格好のモデルとなるであろうことは、行論がおのずから明らかにするはずである。あえて一言述べれば、彼における理系的思考と文系的感性とのみごとな融合は、21世紀の本学の人間環境教育にとってのみならず、日本の青少年の教育において、特に重要である、というのがわれわれの見方である。

以下においては、まず、彼の災害論を一瞥して、今回の災害のとらえ方の一助とし（第１節）、次に、「日本人の精神生活」論を自然観との関連で見届け、無常観の問題を概観し（第２節）、それを彼の俳句論を検討することで、教育への示唆を得ようとするものである（第３節）。

第１節　寺田寅彦の災害論

寺田寅彦は、さまざまなところで震災について論じている。「天災は忘れたころにやってくる」という人口に膾炙した言葉も、寅彦に由来すると云われているほどである。ここでは、かれのエッセイのうち、「津波と人間」、「天災と国防」、「災難雑考」、「日本人の自然観」を中心に検討したい[3)]。

文明と災害　　寅彦が強調するのは、「文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその激烈の度を増すという事実」（5–58）である。彼は、これをもう少し詳しく、以下の６点を挙げて説明している。

（１）　規模の拡大　　かつて人間は、「極端に自然に従順であって、自然に逆らうような大それた企ては何もしなかった」。小さな規模の営みでは、被害もまた小規模である。個人の被害は個人で

２）　ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン（上）（下）』岩波書店、2011年。
３）　『寺田寅彦随筆集』（岩波文庫）からの引用は、巻数とページ数のみを記す。また、寺田寅彦『天災と国防』（講談社学術文庫、2011年）からの引用は、「天」とページ数を記す。

まかなって足りていた。しかし、文明は、自然を征服しようとする野心をもつ。「…いやが上にも災害を大きくするように努力しているものはたれあろう文明人そのものなのである」。というのも、災害は、人が「文明の力を買いかぶって自然を侮りすぎた」（5-61）報いだからであって、従ってそれは、自業自得という訳である。

（2） **有機的結合**　文明の発達に応じて、「国家あるいは国民と称するものの有機的結合が進化し、その内部構造の分化が著しく進展してきたために、その有機系のある一部の損害が系全体に対してはなはだしく有害な影響を及ぼす可能性が多くなり、時には一小部分の損害が全系統に致命的となりうる恐れがあるようになったということである。」（5-59）

寅彦がいうこの有機的結合は、今日、当時には想像も出来ない規模で実現している。現代では、地球規模で世界は緊密に結びつけられている。たとえば、遠く小国ギリシアの経済破綻が、極東の島国日本にも深い影響を与えかねない事態に立ち至っており、日本どころか、世界が、つい先頃のサブプライムローンの破綻に由来するリーマンショック以上のショックを受けるのではないかと懸念されている。むろんこれは自然災害ではないが、世界が有機的に結びついていることの一つの有力な証拠ということができよう[4)]。

今や世界全体が、一つのさらに高度な有機体をなしている。寅彦の時代では、結びつけるのは電線と鉄道であった。今日では、インターネットと飛行機であろうか。これらを介して、ヒト、モノ、カネ、情報が大量に飛び交っているわけである。

（3） **科学への過信**　科学への過信、文明への過信もまた、災害の規模を大きくする原因である。「昔の人間は過去の経験を大切にし保存してその教えにたよることがはなはだ忠実であった」。しかし今日、「そのだいじな深い意義が、浅薄な『教科書学問』の横行のために蹂躙され忘却されてしまった」。そして、「付け焼き刃の文明に陶酔した人間はもうすっかり天然の支配に成功したとのみ思い上が」った。すなわち、固有の風土のなかで、進化論的に自然淘汰という「時の試練に堪え」、「適者」として「生存」する伝統の知恵を、外来の浅薄な知恵で置き換えたのである。（6-62 f.）。このように、進化論的な発想と、外来文化への違和感を、寅彦のエッセイの随所に見出すことができるもの、興味深い事実である。

（4） **人間の欲望**　ところで、これと並んでさらに事柄を深刻にしているのは、人間そのものの本性である。人間には後先を考えない欲がある。これが人をして「利権の争闘に夢中」にさせる。このような人間の本性を抑え、「人間の動きを人間の力で止めたりそらしたりするのは天体の運行を勝手にしようとするよりもいっそう難儀な事であるかも知れない」、と寅彦は嘆いている（5-198）。そして、「あらゆる災難は一見不可抗的のようであるが実は人為的のもので、従って科学の

4） この点に関して、岩井克人「自由放任主義と決別せよ」（『中央公論』2011年11月号）が、広い歴史的視野から語って有益である。2012年１月現在、事態はいよいよ切迫しており、予断を許さない状況である。

力によって人為的にいくらでも軽減しうるものだという考えをもう一ぺんひっくり返して、結局災難は生じやすいのにそれが人為的であるためにかえって人間というものを支配する不可抗的な方則の支配を受けて不可抗なものであるという、奇妙な回りくどい結論に到達しなければならないことになるかも知れない」、と述懐している（5−199）。

こうした言葉を読むと、たちまち「原子力ムラ」のことや、原発をめぐる企業や政治家、官僚、マスコミのことを思わずにはいられない。跳梁する欲深どもが、甚大な被害を引き起こしておきながら、まだ、悔い改めず、原発存続を叫んで無責任に旗を振り続けているのを見ると、なおさらその感を強くする。東電ほどに国土を、しかも長期に破壊した者が、この国にいままでいたであろうか。

（5） 忘却　「津波と人間」で寅彦は、明治29年（1896年）、昭和８年（1933年）に、「東北日本の太平洋岸の津波が来襲して、沿岸の小都市村落を片端から薙ぎ倒し洗い流し、そうして多数の人名と多額の財物を奪い去った」と書いている[5]。「三陸大津波」は、「約満37年」おいて繰り返されたというのである。その後、昭和53年（1978年）に津波が襲い[6]、さらに今回、平成23年（2011年）の大震災である。前の地震から45年と33年の間隔で起こったことになる[7]。これらは37年の誤差の範囲であろう。37年は、記憶し、教訓として生かすに長すぎるであろうか。なぜ、人は過去の経験に学ばないのか、と寅彦は慨嘆する。そしてこう続ける。「２千年の歴史によって代表された経験的基礎を無視して余所から借り集めた風土に会わぬ材料で建てた仮小屋のような新しい哲学などはよくよく吟味しないと甚だ危ういものである。」（天142）これは（３）の、風土を無視した議論は危うい、という警告に関連する論点である。

（6） 警告の無視　さらに、「しかし、少数の学者や自分のような苦労症の人間がいくら骨を折って警告を与えてみたところで、国民一般も政府の当局者も決して問題にはしないというのが、一つの事実であり、これが人間界の自然方則であるように見える。…一朝天災に襲われれば綺麗にあきらめる。そうして滅亡するか復興するかはその時の偶然の運命に任せるということにする外はないという捨て鉢の哲学も可能である」、とつけ加えるのである。寅彦の絶望の深さを知るべきであろう（天143）。これは、（４）がその背後にあることは明らかだが、都合の悪いことは考えないことにすることによって、ないことにしてしまう、というのは、日本固有の思考様式であるかも知れない。

つけ加えるまでもなかろうが、今回の震災や原発事故に関して、一貫して批判し、警告していた少数の学者、研究者たちがいたことをわれわれは知っている。そのうちのお一人、京大原子力実験

５） 寺田寅彦『天災と国防』（講談社学術文庫、2011年）所収。

６） 地震調査研究推進本部地震調査委員会による「宮城沖地震の長期評価」（平成12年11月27日付け）による。http://www.jishin.go.jp/main/chousa/00nov4/miyagi.htm

７） 日本における地震と津波の歴史については、伊藤和明「歴史が語る日本の津波災害」（『環』第46号、2011年、藤原書店）が詳しい。

所助教小出裕彰氏は、講演で、自分の努力が足りないで大事故が起きてしまったことを謝罪しているのである。謝罪すべきは誰であるのか、言うまでもないが、しかし、その謝罪すべき人たちの多くが、謝罪するどころか反対に、「この程度で収まったのは、日本の原発の優秀性の証明であり、その輸出に努力すべきである」、と言っているのは、ほとんど狂気に近く、理解を絶する振る舞いである。

以上、6点にわたって見てきた訳であるが、これに対して寅彦は次のような提案をする。

事故への対応、責任の追及　事故の事後処理でもっとも大切なことは、「今後いかにしてそういう災難を少なくするか」という点である。責任を追及すれば、責任逃れのための隠蔽が行われであろう。また、誰かが責任を問われ、弁解し、そして引責辞任すれば、それで事柄が終わったような気がして、「いちばんたいせつな物的調査による後難の軽減」が忘れ去られる危険がある、と言うのである（5-193)。

そしてこう警告する。責任者に対するとがめ立てに終始するなら、「責任というものの概念がどこかに迷子になって」しまい、「はなはだしい場合になると、なるべくいわゆる『責任者』を出さないように、つまりだれも咎を負わされないように、実際の事故の原因をおしかくしたり、あるいは見て見ぬふりをして、何かしらもっともらしい不可抗力によったかのように付会してしまって、そうしてその問題を打ち切りにしてしまうような」ことが起こるのではないか、と懸念するのである。要するに、責任の問い方が重要なのであって、「人間に免れぬ過失自身を責める代わりに、その過失を正当に償わないことをとがめるようであれば」、そうした弊害はなかろう、というのである（5-194)。

福島原発の場合　福島原発の事故にこれを当てはめて考えるとどうなるか。原発を開発したエンジニアの場合、発電所の管理者の場合、東電の経営者の場合、政治家の場合、安全委員会の専門委員の場合、管轄のお役所の場合、などで寅彦のいう責任の問い方は自ずと異なろう。内部告発したエンジニアやその他の専門家の警告を無視し、封殺し、あるいは、情報をもちつつ「パニックをおこさせないために」、という口実でそれを公表せず、被害を拡大したものの責任、また、情報を知りつつ、あるいは知ろうとせず、お役所の発表を垂れ流したジャーナリズムの責任は、問わなければならないであろう。これは倫理的な問題である。

不思議なのは、廃炉となった原発と、最低1万年は保管しなければならない、危険性の高い使用済み燃料の最終処理方法が決まっていない段階で、原発を実用化してしまったという事実である。恐らく科学・技術の細分化が、全体を考えることを不可能にしてしまい、本来ならその立場にあるはずの政治家や官僚が、専門知識がないが故に思考停止に陥り、目先の利益に惑わされて、推進部門とチェック部門を同一組織内に置くなどという、あり得ない制度を作ってしまったのであった。一旦制度ができれば、制度は自己保存・自己拡張・自己保身という独自の原理で動き出し、誰も止

められない自動機械となるのが常であり、今回も例外ではなかった訳である。

災難の進化論的意義　先に寅彦には進化論的思考法があると述べた。例えば次のような議論はどうであろうか。「われわれ人間は災難に養い育まれてきた」のであって、中国の古い言葉に「艱難汝を玉にす」というのがあるが、自然災害という「虐待は繁盛のホルモン、災難は生命の酵母である」からには、「地震も結構、台風も歓迎、戦争も悪疫も礼賛に値するのかもしれず」、「日本人を日本人にしたのは実は学校でも文部省でもなくて、神代から今日まで根気よく続けられてきた災難教育であったかもしれない」。そして、その修行の成果が出るのは、何十世紀かかるか見当もつかないが、災難は「優良種を選択する試験のメンタルテストであるかも知れない」、と「優生学的災難論」を説くのである。

なるほど、人類史上長く続いてきた、自然災害に対して無力な時代にはそうであったろう。今回また、この大惨事を生き延び、「メンタルテスト」で成長するかも知れない。しかし、そのことは、責任者たちを処罰せず、放逸することを意味しないのはもちろんである。

第２節　「日本人の自然観」

昭和10年10月の『東洋思潮』に掲載された「日本人の自然観」は、寅彦の日本人の精神文化論を知るための好論文である。彼は、精神生活（精神文化）は、日常生活に根ざしており、また、その日常生活は、自然（風土）に規定されている、という強固な見方をもっている。つまり、根底には風土がある、ということである。こういう見方は、ありふれているように見えるが、しかし、超越的な内容をもつ精神文化が生活様式を決定し、また、自然観をも規定している、という見方とはまったく反対である、と言えば、その固有性がうかがえようというものである。

古代アニミズムを別にすれば、自然と人間を対立させ、別々の存在と考えるのが通例だが、寅彦は、これら両者が「実は合して一つの有機体を構成して」おり、したがって「究極的には独立に切り離して考えられない」とし、そこから、自分の方法をこう結論する。「人類もあらゆる植物や動物と同様に長い長い歳月の間に自然のふところに育まれてその環境に適応するように育て上げられて来たものであって、あらゆる環境の特異性はその中に育てきたものにたとえわずかでもなんらかの固有の印命を残しているであろうと思われる」（５-224）。

ここから寅彦は、精神文化の一つの結晶とも言うべき俳句へと論を進めるのであるが、それについては次節で検討するであろう。

日本の自然の多様性と複雑性　寅彦は、いくつかの観点から、日本の自然の特異性について述べ、そこから日本人の自然への構えの特性を導いている。

気候　日本は季節が年周期である温帯に属している。春夏秋冬があり、かつ「天気」は「予測し

難い変化をする」。こうした「温帯における季節の交代、天気の変化は人間の知恵を養成する。周期的あるいは非周期的に複雑な変化の相貌を現す環境に適応するために人間は不断の注意を多様な工夫を要求されるからである」（5-226）。

また、気候の多様は、例えば雨の降り方ひとつとっても、「春雨」「五月雨」「しぐれ」と多様であって、「こういう語彙自身の中に日本人の自然観の諸断片が濃密に圧縮された形で包蔵されている」（5-227）と述べている。すでに俳句への橋渡しがはかられている。

地形と地理　これについて寅彦は、「日本の島環の成因についてはいろいろの学説がある」、と述べ、こう言葉を連ねる。「しかし日本の土地がいわば大陸の周縁のもみ砕かれた破片であることは疑いないようである」。ここから「地形的構造の複雑多様なこと、錯雑の規模の細かいこと」、それらが地殻運動に由来し、その上火山現象が加わっていることを述べて、次のように語っている。「複雑な地形はまた居住者の集落の分布やその相互間の交通網の発達に特別な影響を及ぼさないではおかない。…そうして土着した住民は、その地形的特徴から生ずるあらゆる風土的特徴に適応しながら次第に分化しつつ各自の地方的特徴を涵養してきたであろう。それと同時に各自の住み着いた土地への根強い愛着の念を培養してきたものであろう」（5-228～9）。

火山活動　寅彦は、また、こうした多様性をもたらした地殻変動が、「日本の複雑な景観の美を造り上げる原動力」でもあったことを指摘することを忘れない。「日本の山水美が火山に負うところが多い」と言うのである。このことは、富士山が火山活動によって出来たことひとつとっても、想い半ばに過ぎよう。

厳父の自然、慈母の自然　こうした点を縷々説明したのち、次のような結論を引き出す。「我々の郷土日本においては脚下の大地は一方においては深き慈愛をもってわれわれを保育する『母なる大地』であると同時に、またしばしば刑罰の鞭をふるってわれわれのとかく遊情に流れやすい心を引き締める『厳父』としての役割をも勤めるのである。厳父の厳と慈母の慈との配合よろしきを得た国がらにのみ人間の最高文化が発達する見込みがあるであろう」（5-230）。

あくまで「見込み」であると書いて慎重であるが、寅彦は、それに続いて動植物の多様性について議論を展開し、海胆や塩辛、肝油などにも論を及ぼして、日本の自然が「気象学的・地形学的・生物学的その他あらゆる方面から見ても時間的ならびに空間的にきわめて多様多彩な分化のあらゆる段階を具備し、そうした多彩の要素のスペクトラが、およそ考え得られるべき多種多様な結合をなしてわが邦土を色どっており、しかもその色彩は時々刻々に変化して事前の部隊を絶え間なく活動させている」、と平凡な風土に暮らす住民を羨ましがらせるに十分な筆遣いで日本の自然について語っている。ここから詩が生まれ、俳句が湧き出さずにはおかないと言わんばかりである。

そして、先ほどは「見込み」と慎重であったことを裏切って、「複雑な環境の変化に適応せんとする不断の意識的ないし無意識的努力はその環境に対する観察の精微と敏捷を招致し涵養する」と

述べ、「同時にまた自然の驚異の奥行きと神秘の深さに対する感覚を助長する結果にもなるはずである」、と「最高文化」（＝俳句）の現出を保証して見せるのである（5-236～7）。

日本で自然科学が発達しなかった理由　他方、しかし、自然に対して従順で、逆らう代わりに自然から学ぼうとし、「自然自身の太古以来の経験をわが物として自然の環境に適応しよう」とする志向、すなわち、「厳父の厳訓に服すること」「慈母の慈愛に甘える」ことは、なるほど「生活の安寧を保証する」が、しかしここからは、西洋において発展した「自然を克服せんとする科学」が出現しなかった事実を指摘することを忘れない。そして、「…自然に順応するための経験的知識を収拾し蓄積する」「民族的な知恵」は、確かに「一種のワイスハイトであり学問」ではあるが、「しかし分析的な科学とは類型を異にした学問である」、と言うのである。

寅彦は、しかし、西欧由来の自然科学そのものを批判している訳ではない。彼は、非合理を偏愛する、偏狭な、愛国主義者ではない。そもそも彼自身が自然科学者である。彼が批判するのは、風土を無視して西欧の科学・技術を無批判に導入する愚である。それは次の言葉を見れば明らかだろう。「…発達した西欧科学の成果を、なんの骨折りもなくそっくり継承した日本人が、もしも日本の自然の特異性を自覚した上でこの利器を適当に利用することを学び、そうしてただでさえ豊富な天恵をいっそう有利に享有すると同時にわが国に特異な天変地異の災禍を軽減し回避するように努力すれば、おそらく世界中で我が国ほど都合よくできている国はまれであろうと思われる」。むしろ日本は，容易に学べる（！）西欧科学を手に入れ、かつ、容易に学べぬ（!!）、風土に根ざした「民族的な知恵」を生かせば、世界でまれなる恵まれた国になるであろうと言っているのである。

ところが、寅彦は現状を見て、次のように言わざるをえなかった。「しかるに現代の日本ではただ天恵の享楽にのみ夢中になって天災の回避のほうを全然忘れているように見えるのはまことに惜しむべきことと思われる」（5-238）。3月11日を寅彦が見たなら、その慨嘆ぶりはいかなるものであったろうか。

「日本人の日常生活」　寅彦は、食物に始まり、衣服、家屋、庭園、盆栽生け花、花見遊山から月見も忘れず、さらに農業、漁業にいたるまで、生活の万端に風土が密接に関係していることを論じている。それらの一々を紹介することは控え、2～3紹介するに留めておく。

食物　食物については、「『さかな』の『な』は菜でもあり魚でもある」と述べ、魚介と野菜の豊富なことを指摘し、かつ、調理法に関して、「よけいな調味で本来の味を掩蔽（えんぺい）するような無用の手数をかけないで、その新鮮な材料本来の美味を、それに含まれた貴重なビタミンとともに、そこなわれない自然のままで摂取するほうがいちばん快適有効であることを知っているのである」、と「民族的な知恵」を称揚する（5-239）。

また、「食物の季節性」、すなわち、「はしり」や「しゅん」を尊ぶ点を、食事の多彩とともに他に例を見ない特徴として指摘している。

家屋　家屋については、「障子」の例のみを挙げておく。寅彦は、障子は、「光を弱めずに拡散する効果」があり、「存外巧妙な発明である」、と賞賛している（5-241）。

庭園　「西洋人は自然を勝手に手製の鋳型にはめて幾何学的な庭を造って喜んでいるのが多いのに、日本人はなるべく山水の自然をそこなうことなしに住居のそばに誘致し、自分はその自然の中にいだかれ、その自然と同化した気持ちになることを楽しみとするのである。」（5-242～3）

また、庭園についてこう述べている。「…花見遊山はある意味では庭園の拡張である。自然を庭に取り入れる彼らはまた、庭を山野に取り広げるのである」。そして、月見や星祭りについて、「これも、少し無理な言い方をすれば庭園の自然を宇宙空際まで拡張せんとするのであるといわれないこともないであろう」（5-234）。ずいぶん遠慮した言い方である。次の節で見るように、17文字のなかに宇宙を詠む俳句のことを考えれば、自然世界を庭に取り込み、また、庭を宇宙にまで拡張することは、大したことではない。それよりも、小さな断片に過ぎないものが、巨大な全体を映現するという発想そのものを評価すべきであろう。このような自然との一体感が特徴的だと言いたいのである。

以上述べた日本の自然が、精神にどのような影響を与えたのか。それを次に見てみよう。

日本人の精神生活　「単調で荒涼な沙漠」で一神教が生まれ、「日本のような多彩にして変幻きわまりない自然をもつ国」で八百万の神が生まれ崇拝されるのは当然であろう、と述べているが、これはもちろん寅彦の独創という訳ではない。しばしば耳にする議論である。

ここで注目したいのは、以下の2点である。1つは「無常観」について、もう一つは芸術観、とりわけ文学、なかんずく俳句論である。

無常観　仏教が日本に伝えられ、定着したのは、日本の自然観との親和性、共通性の故だと、寅彦は考える。「…仏教の根底にある無常観が日本人のおのずからなる自然観と相調和するところあるのもその一つの因子ではないかと思う」、と述べている。そして、「鴨長明の方丈記を引用するまでもなく地震や風水の災禍の頻繁でしかもまったく予測し難い国土に住むものにとっては天然の無常は遠い遠い祖先からの遺伝的記憶となって五臓六腑にしみ渡っているからである」と、風土に関連づけて説明している（5-245）。

仏教が受け入れられたのは、「遺伝的記憶」となっている「天然の無常」が原因である、というのはその通りであろう。6世紀に日本に伝来して以来、歴史的にはその通りだとして、問題は、その無常観の行方である。寅彦が書いた昭和10年（1955年）から現在の平成23年（2011年）まで、半世紀以上過ぎている。その間の変化は、人口が4倍近く増えていることだけをとっても、並大抵ではなかったことは容易に想像できる。科学・技術の発展と生活様式の変化は、人の心に与える自然環境の影響の比率を、極めて小さいものにしたはずである。特に、自然から離れた人工空間としての都市に住む者にとっては、ますますそうであったろう。

３月11日の震災の後、われわれは遺伝的記憶が甦り、われわれの心理の在りようを規定しているのかどうか、という問題である。これについては、次節で考えることにしたい。

日本の諸芸術　寅彦は、「日本人の精神生活の諸現象の中で、何よりも明瞭に、日本の自然、日本人の自然観、あるいは日本の自然と人とを引きくるめた一つの全機的な有機体の諸現象を要約し、またそれを支配する諸方則を記録したと見られるものは日本の文学や諸芸術であろう」、と簡潔に述べ、「…最も代表的なものは短歌と俳句であろう」、と論じている（５-246f.）。

それらの特徴は、「…科学者の取り扱うような、人間から切り離した自然とは全く趣きを異にしたもの」であって、「人は自然に同化し、自然は人間に消化され、人と自然が完全な全機的な有機体として生き働くときにおのずから発する楽音のようなもの」であると言う。これに対して、「外国の詩には自我と外界との対立がいつもあまりに明白に立っており、そこから理屈（フィロソフィー）が生まれたり教訓（モラール）が組み立てられたりする」、とその違いを強調している。そして、「万葉の短歌や蕉門の俳句におけるがごとく人と自然との渾然として融合したものを見いだすことは私にははなはだ困難なように思われる」、とつけ加えている（５―247）[8]。

俳句について　また、その歴史について、「ずっと古い昔には民衆のものであった」短歌が、次第に「宮廷人の知的遊戯の具」や「僧侶の遁世哲学を諷詠するに格好な」ものとなったが、しかし、やがて、「階級的束縛を脱し」、俳諧から発句に進化することによって、一般民衆のものとなったと述べている。これによって、「古来の詩人によって養われ造り上げられてきた日本固有の自然観」が、大衆の共有するところとなったとし、「俳句を研究しているある程度まで理解しているあるフランス人」の「日本人は一人残らずみんな詩人である」、という言葉を紹介している（５-249）。

いくつかの問題点　以上、簡単に寅彦の「日本人の自然観」を概観した。まとめれば、①日本の自然は、他に類を見ない複雑で変化に富んでいる。②その自然は、恩恵を与える「慈母」でありつつまた、不可抗な威力としての「厳父」でもある。③ここから、服従しつつ恩恵を享受する、という基本的態度が生じた。④そのため、自然を対象化して分析する自然科学は発達しなかったが、細やかな精神生活を育んだ。⑤その結晶とも言うべきものが、短歌であり俳句である。また、⑥日本人の自然観の根底には、人間と自然との融合、一体性があり、それが、顕著に俳句や庭園などの芸術に現れている。しかし、⑦こうした自然条件を無視して、別の環境から生じた科学や技術を無批判に採用すると、取り返しのつかない厄災が生じる危険性がある。⑧しかし、残念ながら、そうした指摘は無視されがちであって、現に災害が跡を絶たないのは遺憾である、といったことになろうか。

①から④までは、概ねその通りであろう。また、⑤も、短歌や俳句に関して言えば、最も短い詩形の内に、むしろその短さの故に、逆に、独自に発展した言葉の「呪文」的性格（５-248）を用い

８）　この点については、E・フロム『生きると言う事』（紀伊國屋書店、1977／81年）の、テニソンとゲーテの詩と芭蕉の俳句の比較が面白い。（34～40ページ）

て、大自然を取り込む構えをもっていると言えなくもない。ただ問題は、そこから⑥の自然と人間の融合、同一性を言うことができるか、という問題である。農業一つとっても、寅彦が言うように、土や植物はもちろん、季節の移り変わり、気温や湿度などの気候の変化についての細やかな観察がなければ成り立たないはずである。それは簡単に一体化などと言えるような事態であると言えるのか。

また、仮に言えたとして、にもかかわらず、特に明治以降、公害を典型として、自然に対して過酷な振る舞いをしたのは、何故なのか、自然との一体性はどう作用したのか、あるいはしなかったのか、厳父を恐れず、慈母に甘えすぎたのか、また、それは、自然に対してというよりも、人間に対して残酷な振る舞いであったと言いうるが、それと、豊かな精神性とは矛盾しないのか、といった素朴な疑問を払拭できない。

それらは、西欧の技術の為した業だとし、日本の自然を無視した他所の産物の無批判な適用だとしても、適用する人間が日本人であるとすれば、簡単に他所に責任を転嫁する訳にはいかないであろう。心ある学者の警告を無視させる力は何によって生じるのか、この点を阻止できる力が日本人の自然観やその結晶であるはずの徳にないとすれば、悲観的にならざるを得ないではないか。あるいは、無常観が感傷に流れ、現実を直視することを妨げ、あるいは現実を軽視する諦めや投げやりの傾向をもしもたらしたとすれば、問題は深刻であると言わねばならない。

こうした問題は、簡単ではない。近代において西欧で出現した、欲望を肯定し、欲望に駆動され、また欲望を昂進させる経済システム（これを資本主義という）が、伝来の共同体を解体し徳を崩壊させた、という乱暴な説明では、とうてい現状を尽くすことはできないであろう。前の拙論で、近代人の傲慢を、情報の所有に求めてみたが、むろん不十分である。あるいは、先に述べたように、自然から離れ、人工空間にいることがその理由の一班をなしていると言えるかも知れない。人間は自然から生まれたにもかかわらず、自然や物がもっている抵抗力、自然の奥深さを忘れていることに、あるいはさらに、身体のもつ不条理な力やそれへの無力を、見ないようにしている傾向が、少なくとも人間の傲慢を助長していると言えるかも知れない。

しかし、この問題については、別の機会に譲るとして、次節では、教育としての俳句について見ることにしよう。それによって、先に指摘しておいた無常観についても、ある示唆を受けとることになろう。

第３節　教育論としての「俳句の精神」論

教育論といっても、俳句教育をすれば、様々な問題が解けるといったような話ではない。もしそうだとすれば、すでに何千万人という俳句愛好者がいる我が国では、諸問題はとっくに片付いてい

るはずである。そうはならないのは、俳句が無力だからではなく、それがもっている広義の教育的能力に関して、まだ、十分な理解が進んでいないからではなかろうか。

以下、そうした観点から、寅彦の俳句論を瞥見したい。

俳句の成立と必然性　寅彦が言う、俳句を俳句たらしめる「俳句的要素」とは、「古来の日本人が自然に対する特殊な見方と態度」のことだという。これは前節ですでに見たように、「自然と人間とを別々に切り離して対立させるという言わば物質科学的の態度をとる代わりに、人間と自然とを一緒にしてそれを一つの全機的な有機体と見ようとする傾向」である。さらにこれを説明して、「…西洋人は自然というものを道具か品物かのように心えているのに対して、日本人は自然を自分に親しい兄弟かあるいはむしろ自分のからだの一部のように思っている」のであって、「西洋人は自然を征服しようとしているが、従来の日本人は自然に同化し、順応しようとしてきたと言われなくはない」、と多少レトリカルに控えめに述べている（5-275)。

「荒海や…」　そして、よく知られた芭蕉の「荒海や佐渡に横とう天の川」を論じて、次のように述べている。これを西洋人から見れば「結局一枚の水彩画の内容の最も簡単なる説明書き以外の何物でもあり得ないであろう」。しかるにこれが日本人にとって「美しい『詩』」であるのは何故か、と問う。ここには、なるほど、主観的要素は希薄で、「横とう」という言葉にわずかな主観のにおい」がある程度である。にもかかわらずこの句が「限りなき情緒の活動」を喚起するのは何故か、と問うのである。

これに対して、寅彦はこう答える。「『荒海』は単に航海学教科書におけるがごとき波高く舟行に危険なる海面」ではなく、「四面に海をめぐらす大八洲の国に数千年住み着いた民族の遠い祖先からの数限りない海の幸と海の禍との記憶でいろどられた無始無終の絵巻物」であって、「一面においてわれわれの眼前に展開する客観の荒海であると同時にまたわれわれの頭脳を通してあらゆる過去の日本人の心にまで広がり連なる主観の荒海」でもあるという。一つの言葉が、「濃厚に圧縮された…全国民に共通で固有な民族的記憶でいろどられている」というのである。「佐渡」も「天の川」も同様であって、単なる地名の佐渡でも、天体の天の川でもなく、「莫大な空間と時間との間に広がる無限の事象とそれにつながる人間の肉体並びに精神の活動の種々相を極度に圧縮し、煎じ詰めたエッセンス」があり、これらの言葉は、聞いたものに、「その中に圧縮された内容を一度に呼び出し、出現させる呪文の役目」をもっているというのである（5-276f.)。

ただ、一言いっておけば、言葉において主観と客観がともに表出され、あるいは含意されているとしても、そのことが直ちに主観と客観の同一性だとか融合という事態を意味する訳ではない、ということである。荒海にどんな共同主観的、民族的記憶が含まれようと、海は、航海すべき対象であることをやめる訳ではない。ましてや、航海する人間と海とが一体となる訳ではないのである。

「象徴国の国語」　変化に富んだ豊かな自然と、それが呼び起こした詩歌の伝統が、言葉の「魔

術」を鍛え、すべてのひとの共有物となっている。こうして日本語は「象徴国の国語」となっており、これが俳句を支えているのである。とりわけ季語（季題）が、この魔術、呪文的性格をもっている、と言う。「限定され、そのために強度を高められた電気火花のごとき効果をもって連想の燃料に点火する役目をつとめるのがこれらの季題と称する若干の語彙である」（5-279）。

しかし、いずれの国語においても、言葉が単にものを指すだけではなく、共有された「民族的記憶」を出現させることはむしろ当然のことである。ただ、豊かな自然をもつ民族が、その自然を詠うというかたちで、詩作という芸術として営々と長年にわたって育んで来たことを考えれば、とりわけ日本語が「象徴国の国語」として形成されてきたことを認めてもよいかも知れない。

「俳句の精神とその修得の反応」　むしろ注目したいのは、寅彦が芭蕉の、「春雨や蜂の巣つとう屋根の漏り」に加える説明である。先の、「荒海や…」と同様、これも、「表面上は純粋な客観的事象の記述」に過ぎないが、しかし日本人にはこの句は「肉感的」であるという。その所以は、「われわれの心の皮膚」が「かなり冷たい冷湿」を感じ、「われわれの心の鼻はかびや煤の臭気にむせる」からであって、「そのような官能の刺激を通じて、われわれ祖先依頼のあらゆるわびしくさびしい生活の民族的記憶」が呼び覚まされるからだという。同時に「『春雨』のどこかはなやかに明るくまたなまめかしい雰囲気と対照されてこの雨漏りのわびしさがいっそう強調される」と説明してみせる。さすがに鋭い鑑賞能力だが、前に述べていたことと同趣旨である。

問題はここからである。雨にぬれそぼった「蜂の巣」が「注意の焦点をなして全句の感じを強調している」といい、「この句を詠んだ芭蕉は人間であると同時に、またこの蜂の巣の主の蜂でもあったのである」、と解き明かす。そして、「このように自然と人間との交渉を通じて自然を自己の内部に投射し、また自己を自然の表面に映写して、そうしてちがった一段高い自己の目でその関係を静観するのである」（5-284）と展開する。

これは、単なる（と言っては失礼だが、京都学派が好んで語る）主客の合一のような話ではない。短歌が主観的傾向が強いのに対して、俳句は極端に短いが故に、主観的なものを入れる余地がなく、自ずと割愛され、象徴的なものを代用することとなる。「その結果として、［俳句の―杉田］諷詠者としての作者は、むしろ読者と同水準に立って、その象徴の中に含まれた作者自身を高所からながめるような形となる」、と言うのである。これは重要な指摘と言わねばならない。俳句の作者は、作品のなかで不在であるが故に、作者自身を超えた存在になることができるのである。

これをまた、別の角度から言えば、「…俳句における作者の自己の特殊な立場は必然の結果として俳句に内省的自己批判的あるいは哲学なにおいを付加する。」そして、「『風流』といい『さび』というのも畢竟は自己を反省し批評することによってのみ獲得し得られる『心の自由』があって、はじめて達し得られる境地であろう」と言うのである（5-286）。この、①高い視点、②反省、批評、哲学的傾向、③こころの自由は、いずれも同じことを言っているのであるが、これほど重要な

ことは他にない。というのも、これほど今日の人間に欠けているものはないからである。傲慢とは端的に反省の欠如である。権力者たちに欠けているのは、哲学的思索、高い視点、すなわち無私の気概である。社会全体が余裕をなくし、他者、とりわけ弱い他者に対して「自己責任」を厳しく問うのは、「心の自由」の欠如と言わずして、一体何と言うべきであろうか。

無常観の行方　もう一点注目したいのは、宿題にしておいた無常観についてである。驚くべきことに、と言いたいのだが、寅彦は次のように述べている。「風流とかさびとかいう言葉が通例消極的な遁世的な意味にのみ解釈され、使用されてきた。これには歴史的にそうなるべき理由があった。すなわち仏教伝来以来今日まで日本国民の間に浸潤した無常観が自然の勢いで俳句の中にも浸透したからである。しかし、自分の見るところでは、これは偶然のことであって決して俳句の精神と本質的に連関しているものとは思われない」（5-286）。

俳句と無常観は、本来無関係である。これだけでも重大発言と思われるのだが、寅彦は、さらに、「仏教的な無常観から解放された現代人にとっては、積極的な『風流』、能動的な『さび』はいくらでも可能であると思われる」というのである。無常観はすでに過去のものである。そして寅彦は、無常観とは無縁の、時代に合った風流とさびを提案する。「日常生活の拘束からわれわれの心を自由の境地に解放して、その間にともすれば望ましき内省の余裕を享楽するのが風流であり、飽くところを知らぬ欲望を節制して足るを知り分に安んずることを教える自己批判がさびの真髄ではあるまいか」、というのである。

さらに寅彦は、俳句に対する誤解に対して、「俳句を修行するということは、…、退嬰的な無常観への逃避でもなければ、消極的なあきらめの哲学の演習でもなく、また、ひとりよがりの自慰的お座敷芸でもない」と批判する。そして、「それどころか、ややもすればわれわれの中のさもしい小我のために失われんとする心の自由を見失わないように監視を怠らないわれわれの心の目の鋭さを訓練するという効果をもつことも不可能ではない」、と言い切るのである。

われわれが、俳句に教育的意義を認めるのは、まずはこの点においてである。

もう一点は、観察の重視である。「俳句の修行はその過程としてまず自然に対する観察力の錬磨を要求する。」その成果は、「俳句をはじめるまではさっぱり気づかずにいた自然の美しさがいったん俳句に入門するとまるで暗闇から一度に飛び出してでも来たかのように、眼前に展開される。今までどうしてこれに気がつかなかったか不思議に思われるのである」（5-287）。

しかし、これは「修行の第一課」に過ぎない。「…自然の美しさを観察し自覚しただけでは句にはできない」からである。「次にはその眼前の景物のなかからその焦点となり象徴となるべきものを選択し抽出することが必要である」。この作業は、しかし、「もはや外側に向けた目だけではできない仕事である」。そして、「第一課」に接続する。「自己と外界との有機関係を内省することによって始めて可能になる」という訳である（5-287）。

なにも、教育の一環として俳句を正課にいれるべきだ、と主張する積もりはない。絵を描く子もいれば、音楽が好きな子もいるであろう。詩は苦手だ、と言う子どももいるはずである。強制は、一番良くない。しかし、それを認めた上で敢えて言えば、俳句を鑑賞することぐらいは、積極的にしてもいいのではなかろうか。年齢を超えて同好の士が語り会える場ができるであろう。親子が俳句を語り、家族旅行が吟行になれば、写真やビデオに収めなくても、印象的な風景や一瞬が、句が記憶となって共有されるであろう。低成長時代に相応しい趣味であるというのは余計なお節介であろうか。

寅彦は、俳句の修行について、「一面においては日本人固有の民族的精神の習得である」と述べている。なぜなら、「…俳句という特異な詩形の内容と形式の中に日本民族の過去の精神生活のほとんど全部がコンデンスされエキストラクトされている」からであって、「俳句を研究することは日本人を研究することであり、俳句を修行することは日本人らしい日本人になるために、必要でないまでも最も有効な教程であり方法である」と結論している（5-288）。

お わ り に

３月11日を知らない寅彦の議論が、どこまで有効であるのか、判断は難しい。深い絶望の淵にいて、心理的にも肉体的にも動けない、夥しい人がいることを忘れてはならない。ほんのわずかな体験に過ぎないが、女川と石巻を９月に訪ねる機会があったが、文字通り言葉を失ってしまい、その後の無気力はいかんともし難かった。

われわれは、寅彦が描く、極東の「もみ砕かれた破片」の住人である。先祖たちが住み暮らしてきた土地に、にわか作りの物を並べ、まだ手になじまない業を懸命に営んでいる段階である。しかも、おそらくは父祖たちには不思議でも何でもないはずの、人生が一瞬の自然の営みであることを、いまさらながら思い知ったのであった。それが、われわれを、かつて親しかった無常の想いを懐かしく想起させ、回帰させるよう促すのは、致し方ないことであるかも知れない。

しかし、本稿を書きながらしきりに思ったのは、寅彦の自由な心と的確な表現力であった[9]。また、心の余裕とバランスであった。こういう優しい力こそ、今教育で最も必要な目標ではなかろうか、という想いであった。

無常観に対する寅彦の態度は、いっそ爽快である。これは、少なくとも私にとっては、モンテーニュと並んで、大きな慰めであったことを告白して、擱筆する。

（2011年10月）

9） 寅彦のエッセイ集『柿の種』（岩波文庫）は、その見事な集積である。

【概要】　寺田寅彦は、物理学者であるとともに文学者である。かれの的確な表現能力は、自然科学者のそれのみならず、特に俳人としての観察力と感性に由来するのではないであろうか。それが、かれに心の余裕を与え、爽快な思索力と遠くを見通す目を与えたに違いない。３月11日以降の教育を考えるにあたって、寅彦は逸することのできないモデルであり、目標であるように思われる。無論だれも寅彦になれる訳ではないが、目標は大きいほどいいではないか。ここでは、かれの災害論と「日本人の自然観」を検討した。